

ミライのフツーツーに 向かって

山村と都市が共存する豊田市で、どんなミライをめざしていくのか。そのミライのフツーツーをどのように創っていくのか。おいでん・さんそんセンターを運営する(一社)おいでん・さんそんの正会員に想いを語ってもらいます。

第6回 高野雅夫さん



1962年山口県生まれ。名古屋大学大学院環境学専攻教授・博士(理学)。木質バイオマスエネルギーや再生可能エネルギーの技術開発とそれらの普及を通じた里山再生について農山村をフィールドとして研究を行う。最新著書は『自然(じねん)の哲学〜おカネに支配された心を解放する里山の物語』(ヘウレーカ、2021年)

ミライの里山の姿を求めて

私たちが恵那市飯地町の里山に住み始めてから6年。目の前には耕作放棄された棚田が10枚あまり。里山再生をめざしてきたものの、私たちの手に負える広さではない。そうこうしていたら、あいち海上の森で開催されている「里山暮らし講座」の修了生たちが、「本物の里山暮らしを体験してみたい」と言う。「じゃあ、うちに来てやってみる?」ということになって、紺屋(こうや)ラボは始まった。紺屋は我が家の屋号である。

参加費はなく、報酬もない。交通費と昼食は参加者負担。ケガなどの保障はしないので参加は自己責任で、というやり方だ。メンバーは名古屋都市圏に住む20代から40代の10名あまり。女性が多い。「やりたいことだけやる、休みたくなったら断らずに勝手に休む」がルールだ。ススキ野原の耕作放棄田で、三角に組んだ竹の支柱に刈ったススキの束を立てかけて小屋にする。敷地内に生えているワラビやフキを摘み、ブルーベリーを収穫。海上の森の「森女養成講座」を終了した森女たちがチェーンソーで木を伐り小屋作り。




彼らは口々にここで一日過ごす心身ともにリフレッシュできるという。特に計画したわけでもなく自然発生的に始まった紺屋ラボだが、これって現代的な里山のあり方かも、と思えてきた。かつての様相とは全く違うが、時々都会からやってきて心と体を養生するために活用する。これも一つの里山としての在り方ではないかと思う。

イベント情報

小田木人形座旗揚げ公演 農村舞台アートプロジェクト2020

- 日時 2022年9月24日(土) 14:00-15:00 会場13:30
- 場所 小田木町八幡神社(豊田市小田木町シツキ)
※雨天時は稲武交流館
- 入場料 1,000円(中学生以下無料) 豊田市民文化会館、稲武交流館にてチケット販売
- 内容 少なくとも100年以上続いていた小田木の人形浄瑠璃が途絶えたのは、全国的な飢饉に見舞われた1875年のこと。俵約令により、歌舞伎や浄瑠璃への取り締まりが厳しくなり、140年近く公演されませんでした。その小田木浄瑠璃を復活させようとする有志が集まったのは、2013年(平成25年)1月。古い文献や、教えてくれる人もいない中、岐阜や長野、大阪などの人形座の協力を経て、小田木人形座を復活することができました。今回は、満を持しての「旗揚げ公演」となります。
- 演目
三番叟(さんばそう)、壺坂霊験記(つばさかわけいげんき) 内の段(うちのだん)、山の段(やまのだん)
- 主催・問合せ 公益財団法人豊田市文化振興財団文化事業課(月曜休館) 0565-31-8804
- 協力 豊田市稲武コミュニティ文化部会 小田木町自治区

稲武でロボットを制作しませんか? VIVATA ROBOCON in INABU参加者募集

- 日時 【開発期間】2022年8月6日(土)~10月8日(土)の毎週土曜日 13:00~17:30(可能な範囲で参加ください) ※開催日にいつでも事前予約なしで無料体験が可能【本番】10月30日(日)
 - 場所 【開発期間】INABU Work Space(豊田市稲武町タヒラ1-4)
【本番】道の駅どんぐりの里いなぶキャンピー(調整中)
 - 参加対象 小学4年生から中学3年生
 - 募集人数 10名
 - 参加費 ロボット制作に必要な実費(モーター、タイヤ、ギアなど初期に5,000円程度~上限10,000円) ※ロボット制御ツールVIVIWAREおよびプログラミングに必要なタブレットは貸与
 - 内容 中山間地における次世代デジタル人材の育成を目的として、稲武を舞台にロボットコンテストを開催。フィールドに散らばったオブジェクトを回収するロボットを子どもたちの自由な発想で製作するプログラム。詳細は、QRコードから確認ください。
- ロボコンについて  
- 応募はこちらから 
 - 主催・問合せ 合同会社STUDEO Local Activators 担当/中井隆也(090-7042-7106)、竹中達史(090-9152-5260)



「つながる力でミライを変える」おいでん・さんそんセンターの活動をご紹介します!

おいでん・さんそんSHOW

9月号
2022.09.01発行

PICK UP

旭地区敷島自治区にある旧杉本保育園を地元住民、学生、企業社員が木質化

旭
あさひ

住民自ら作り出す支え合いの拠点「しきしまの家」



壁に貼る板材は、旭木の駅プロジェクト(※)で地域住民が間伐した丸太を、旭八幡町の八幡製材で製材してもらったもの

8月20日(土)、21日(日)、旭地区の敷島自治区にある旧杉本保育園の3部屋を木質化する改修プロジェクトが行われました。地域住民、敷島自治区と交流のある愛知学泉大学の学生、プロジェクトを支援する(株)三河の山里コミュニティパワー(以下、MYパワー)社員、当センターがつないだりコージャパン(株)豊田営業所と(株)ワイズの社員各日それぞれ1名が、地元大工さんの指導を受け、旭木の駅プロジェクトで地元住民が間伐した木材を薄い板に加工して、壁に貼り付ける作業に汗を流していました。

誰もが自分らしくいられる居場所づくり

敷島自治区は、この整備で「しきしまの家」という居場所づくりを目指しています。地域の子ども、お母さん、高齢者、敷島自治区で活動する森林ボランティア、企業の社員など、誰も

が気軽に立ち寄り、お茶を飲みながら会話できるフリースペースや喫茶室、それに加えて「しきしま支え合いシステム」の事務室が設けられる予定です。

「しきしま支え合いシステム」とは、高齢者のみの世帯、一人暮らしの高齢者、子育て世帯など「困っている人」を、同じ自治区に住む元気な高齢者、特別な技能を持つ人、いくつかの仕事を組み合わせて生計を立てる移住者など「お手伝いできる人」が有償ボランティアとして支える仕組み。例えば、一人暮らしの高齢者が自宅の雨樋が詰まって困った時、「しきしまの家」に相談すれば、専門のスタッフが自治区の住民や、縁のある人に繋いでくれるというものです。マッチングを担う事務局運営費は、自治区の住民が各戸の電力契約を地域新電力会社であるMYパワーに切り替えることで出る利益などから賄うことを想定しています。

(※)山主が伐り置き間伐により山に放置されている材を山から出し、「木の駅」(土場)まで運べば、「地域通貨」が対価として得られるという仕組み



①協力して作業を進める地元住民
②現場合わせで板をカットする様子
③愛知学泉大学の学生
④エアナイラーで壁に板を貼る様子

敷島自治区は、将来への危機感から2010年に自治区の将来ビジョン「しきしまときめきプラン」を策定して以来、5年ごとにその内容を見直してきました。「しきしまときめきプラン2020」の重点プロジェクトとして「支え合い社会創造プロジェクト」があり、「しきしま支え合いシステム」はその中心事業に位置付けられています。

支えられ上手になるための仕組み

なぜ、「しきしまときめきプラン2020」に“住民どうしの支え合い”が定められたのか。プラン策定委員長の鈴木辰吉さんにその経緯を聞いてみました。

『しきしまときめきプラン2015』の公開討論会の際、旭地区の老人福祉センターぬくもりの里の当時の支所長が、『旭の人は支えられ下手、これからは支えられ上手にならないといけない』と発言されたことが印象に残っていました。その後、民生委員として滋賀県米原市の大野木長寿村まちづくり会社に視察に行きました。地区の住民60名が社員、社員の平均年齢は70歳、食堂の運営や高齢者の暮らしを支援する住民どうしの支え合いを事業として展開していることを知り、目指す姿はこれだ!と思いました

困りごと、手伝えることの実態調査

「しきしま支え合いシステム」の構築に向けてプロジェクトチームを立ち上げ、2021年1月には、地域課題の解決を事業目的の一つとするMYパワーと連携して、困りごとの実態調査を行ったそうです。中学生以上の住民に「困っていること」「お手伝いできること」を尋ねたところ、8割以上の回答があり、「困りごとに対して、お手伝いできる人がほぼ同数いる」「田畑の管理や草刈り、鳥獣害に困りごとが集中している」ことが判明しました。また、若い子育て世代からの回答には、「子どもの遊び場」「気兼ねなく集える拠点」

「喫茶やコインランドリーのあるたまり場」への期待が含まれていました。

この結果を受け、「お年寄りの命と暮らしを守るチーム」「草刈りお手伝いチーム」「みんなのたまり場づくりチーム」「町内会への普及チーム」の4チームを編成してプロジェクトを推進。「困りごと・お手伝いできること」の記名式の調査とMYパワーへの電力切り替えによる「支え合いシステム」の安定的な運営財源を確保するための集落説明会が並行して実施されています。

移住者受け入れの先にある支え合い社会

敷島自治区の現在の住民数は、330戸974人。空き家の提供など移住定住に熱心に取り組み、10年間で40世帯、96人の移住者を呼び込んだことが評価され、2020年11月には「令和2年度全国過疎地域自立活性化優良事例表彰」で最高賞である総務大臣賞を受賞しています。今回の「支え合い社会創造プロジェクト」の実現は、その受賞に甘んじない、自治区にとっての新たなチャレンジだと言えます。



プロジェクトは「支え合い新聞」で住民に周知されている

「移住者を受け入れ続けても、人口減少は止まりません。人口減少を正面から受け止め、少数社会でも人と人がつながり、支え合い、ありのまま安心して暮らし続けられる地域経済・自治モデルにしていきたい」と鈴木さん。

自治区長の後藤哲義さんは、「昨日今日と、作業が進んで形になってきた様子を見て正直ホッとしています。みなさん積極的にやってくださっています。しきしまときめきプランを作るようになって課題がはっきりしたことで『地域のために、地域の人が汗を流す伝統』が徐々にできてきました。高齢化、人口減少でも、『やれない、できない』じゃなく夢を語って実現していく。今ではなく、10年後、20年

後の地域を見据えてやっています。苦労は全く感じていません。楽しいです」と話しました。

今後、山村地域で高齢化、人口減少が進み続けた時、「もう自分たちの力ではどうしようもない」と諦めず、自分たちの力だけではどうしようもないからこそ、地域に住む身近な誰かに困りごとを伝え、地域外からの企業、森林ボランティアにも関わってもらいながら暮らしと地域を維持していく。敷島自治区が目指している社会であれば、最期まで充実した人生と、その人生の舞台となる地域の維持が叶えられる、そう感じました。(木浦幸加)



report 小中学生が山村地域の自然の中でしかできないプログラムを体験

セカンドスクール2022夏フリー版を開催



夏休みに入り、豊田市の山村地域では、小中学生を対象とした「農作業や自然の中でほんもの」を体験するセカンドスクール2022夏フリー版が各地で開催されました。今年は数年ぶりに宿泊を伴ったプログラムが実施されるなど、各プログラムはとても充実した内容になりました。

7月31日(日) 下山地区「おいしい体験 in 下山」

下山地区では、13名の小学生が参加し、かぼちゃやピーマンの収穫体験のほか、生き物の先生と一緒に川での生き物観察や川遊びを行いました。昼食は農村舞台のある神社の境内でお弁当を食べ、長年協力いただいている地域の方々に見守られながら、楽しそうに時間を過ごしていました。

7月31日(日)～8月2日(火) 旭地区「山っこくらぶ」

「山っこくらぶ」では、29名が旭地区にある古民家に泊まり、山村の暮らしを体験しました。川では、これまでのセカンドスクールに参加した小学生が中学生になり、グループリーダーとして、自作した釣竿を配ったりしていました。古民家では、木工体験に夢中になっている子もいれば、ご飯の準備をお手伝いしている子もいて、地域の受け入れ家族、大学生のサポートメンバーなど、多世代が混ざり合いながらも、思い思いの時間を共に過ごしている様子が印象的でした。

8月2日(火)～4日(木) 稲武地区「山のこどもになる!」

稲武地区では久しぶりに宿泊でのセカンドスクールが復活、19名の参加がありました。一番大きなトウモロコシを取った人が優勝となるトウモロコシ狩りから始まり、きれいな稲武の川での川遊び、夜には肝だめしを行いました。翌日は5つのグループに分かれて地元農家に宿泊する農泊体験など、普段

まちでは体験できない稲武の大自然を思いっきり堪能しました。参加した子どもたちは「思いっきり遊べて楽しかった」「また来年も来たい」と充実した3日間を過ごしたようです。

8月2日(火)～4日(木)、23日(火)～25日(木) 旭地区「あさひ山里ぼうけん遊び隊」

旭地区のちんちゃん亭では8月の前後半に2回、「あさひ山里ぼうけんあそび隊」が開催され、前半13名、後半13名の参加がありました。「自由・人権・主体性」の3本柱で子どもたちが何をするか、どんな過ごし方をするか、自分自身で決めて自由に過ごします。滞在中ずっと友だちと一緒に過ごす子や、びしゃびしゃになるまで水遊びする子など、それぞれが思い思いにイキイキと過ごし、たくさんの笑顔が見られました。子どもたちも「時間が過ぎるのが早すぎる」「帰りたくない」とあっという間に過ぎる3日間を大いに満喫したようです。

セカンドスクールは春と夏の2回開催され、次回は来年3月に春のフリー版が開催予定です。ご興味のある方はセンターまでお気軽にお尋ねください。(田中あつこ、川端光平)



山っこくらぶ(旭地区)



山のこどもになる!(稲武地区)



あさひ山里ぼうけん遊び隊(旭地区)